Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-08-02

長くて短かい1日（<特集1>阪神・淡路大震災 第2部 体験談）

小川, 敏雄

(Citation)
神戸大学医学部神緑会学術誌,11:100-102

(Issue Date)
1995-10

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81007401

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81007401

特集第２部――体験談

長くて短かい１日

小川　敏雄（38年卒）

当日は，神戸市東灘区にある宮地病院で宿直をして居た．その日の夜は，救急車が珍らしく３台も続けて来た．２人の若い看護婦さんと事務当直の若者と眠い目をこすりながら深夜の４時近くまで忙がしく動きまわっていた．近くの寮に住んでいる腹痛で来院した商船大学生を入院させた後，いつも来る神戸市の救急車でなくあまり見かけない芦屋市の救急車が来た．30才ぐらいの少し酒臭がある男性が乗っていた．どうやらこの夜は，六甲山を越えた神戸市北区にある神経科の病院から無断で抜け出してJR芦屋駅前の歩道橋の上から自殺するために飛び降りたらしい．ところが，幸か不幸か停車中の車の上でドシーンと受け止められ，車の屋根は大破したらしいが，本人は傷一つなくいたって元気大声で「死にたい」「何んで結婚出来ないのだ！」など色々と喚いている．

こんなに静かな深夜に大声を出す一人の泥酔者の入院で熟睡中の沢山の人々を突然起すわけにはいかない．診察にて外科的には問題が無いので脱走中の病院へこの救急車で転送することにしたが，病院の担当者と話がつき救急車が立ち去るまでは，30分以上経ってからであった．

看護婦さん達の「おやすみなさい」と言う声と笑顔を笑顔と眠気で受け止めて１階と２階に別れた．医師宿直室は１階であるが救急外来から少し遠く，又急患で呼ばれた時にすぐ駆けつけられる様にと目の前の階段を昇ったところにある２階の約20畳ほどの広さの医局の中央で長椅子の背を広げて，いつも山登りに持ってゆく二つの寝袋を二重にして寒さを防ぎ潜り込んで熟睡中であった．

突然激しい上下運動を全身に痛いほど感じて飛び跳ね起こされ，ベッドの上に立ち上った．一歩も動けない．転がりそうになって思わず，何かに両手で掴って，

体をやっと支えている。何が起ったのだ，これは……“ゴー”っと大きな音が何重にも重たく身を押し包む，地震だ！夢か……．信じられないほどものすごく大きい．これはどうなるのだ，部屋中いっぱいある本棚，本箱，机，椅子，ロッカー，その他ありとあらゆる物が，飛び跳ね踊る様に倒れてころがるのが暗がりでもわかる．建物どころか，大地までが裂ける様だ．頭の方へ襲み付く様に倒れて来たロッカーを両手で力いっぱい受け止め必死に支える．コンクリートの床が“ドーン”と抜け１階のコンクリートの大きな折れた柱がニョキニョキ大きな竹の子の様に突き貫ける．部屋が傾く動けない．もうすぐ天井が落下して来るぞ！こんなに元気な自分が……今絶対に死ねない．生きなければ……最悪のことを一瞬感じた時，突然静かになった．助かった……生きている．恐ろしい暗い長いトンネルを胸が苦しくなりながら，必死で走り抜けた気持がした．部屋のなかはいっぱいにコンクリートの粉煙と粉塵，それに鼻を突く臭い臭が焼けつき咳が出る．目がしむ．

どこからか「オーイ」「オーイ」と男の叫ぶ声が不思議な静けさの中から頭を刺す様に耳の中に飛び込んで来た．何もなかった様に他に物音一つしない．何かの下敷になって助けを呼んでいるのか．

入院患者さん達（約180人）はどうなっているのか．１階の隣り合わせの宿直室に居る，つい先程まで笑顔をみせていた．あの看護婦さん達と若者は……，ガスもれは……，火災は出ていないのか……沢山の心配事が一気に胸の中に沸き上って来た．

震源地はどこか，太平洋の沖か．今まで地震が殆どない神戸でもこんなに被害が大きい．震源地に近づくにつれて，どんな大災害が発生しているのか．尼崎の自宅の方は，家族は，これはやはり夢を見ているのか，夢であってほしい．

まずこの部屋から脱出しなければならない．体が冷える，寒い，床にはありとあらゆるものが転がり積み上っていてほんのわずかでも移動しにくい．斜に寝ころんでいるロッカーの上に立ち上って滑って転倒する．暗がりでやっとズボンを探し出し，靴もなんとか見つける．小さな靴下はとても発見出来ない．車とロッカーなどの隙束は偶然見つける．幸いロッカーの戸がほんの少し開く，隙間に肩まで腕を入れてワイシャツ２枚指先で探り出して着込む．すぐそばのソファーの上に置いていた上着は何かの下に潜っているのか見つからない。ドアーも窓も建物が歪んでいるので力を入れてみるが開かない．閉じ込められてしまった．

まだ，ガスも煙の臭いもしないので慌てなくてもよいが，大きな余震が今度来たらここは安全ではない．窓ガラスを破るか……．思い直して再び窓の隙間に両手を入れて，全身の力で引っぱる．半分近く開いた．

下を覗くと地下まで吹き抜けになっている．窓枠に立って飛び越そうと試みかけたが，距離があり失敗すると命にかかわるので断念する．屋上の大きな水槽タンクが破損したのか，水が大雨の様に“ザァー，ザァー”降って来て立っている足元がつるつる滑る．降りるにもロープになる様なものはない．ドアーの上に人一人なんとか抜け出ることが可能な小さな天窓を思い出し，ガラスを破ろうかとすると，天窓の向うの廊下から男の声がした．

「先生大丈夫ですか」「閉じ込められたが大丈夫だ」人の声を聞いて少し落ちつき，少し開いた窓の外へ顔を突き出す．首をまわして周囲を眺めるとさきほどは自分の脱出のことでいっぱいで気がつかなかったが，いつも見なれた景色が一変していた．

目に飛び込む木造の家々総てが２階の屋根を残して崩れ落ちていた．路上に大きく座り込んでいる家々もある．あの家やこの家の人達皆無事に逃げ出せたであろうか．近くには火はどこにも出ていない様子で少し安心した．すぐ左側に見える４階建の看護婦寮はいつの間にか１階部分がなくなっていた．地面が波打って変形している．裂け目も見える．「ガラスを破りますから離れてください」と言う声を背に受けて振り向く．破る音と飛び散る音が部屋の中に広がり耳に響いた．倒れたロッカーと本箱などを少しずつ引きずってやっと積み上げて踏み台にして窓枠に残っているガラス片での怪我を防ぐため毛布をのせて広げ，両腕を乗せ力を入れ，思い切り飛び上り頭から廊下の方へ転がり出た．さきほどの男性が，天窓の下にドアーに接していつも植木鉢を上に５，６ケ乗せて並べていた長方形の大きな台を横に倒して積み重ねてくれていたので，約１m半の高さの台が出来ていたが，頭の方から勢いよく飛び出して，転がり落ちたので台の上で背中でワンバンドをして床に転落，生憎，ここにもコンクリートの巨大な竹の子があった．

頂上で臀部を直撃，強打したが必死なので痛みは少ない．すぐに立ち上った．建物が斜になっているので足元がふらつく．暗いが小さな非常燈が点いているので心強い．今まで気付かなかったが，けたましく非常ベルが鳴り響き続いている．

コンピュータで合成した女性の声が「非常口はこちらです」「非常口はこちらです」とおちついて繰り返して言っている．その方へ降りる階段を覗くとむなしく完全に崩壊していた．すぐもう１つの階段の方へ大小沢山の瓦礫を蹴散らして走る．ここもやはり崩れていたが，１階の総てが腰を抜かした様に崩壊していた

ので，建物が低くなり，すぐそばにある廊下の突き当りのガラス窓を破って，建物の横にある出入口の大きな軒の上に乗って，路上へ飛び降りることが出来る様になっていた．すでに患者さん達のここからの脱出が一列になって始まっていた．

1月17日の長くて短い1日はこの後，入院患者さん達の救出，震災で受傷して病院へ集って来た人達の路上や駐車場などでの戦場の様な治療，重傷者達の他病院へのなかなか来ない救急車での転送の様子．崩壊した1階に閉じ込められた看護婦さん達の救出，入院患者さん達の転医，その他などが続く．

地震による貴重な体験を後世へ伝えるために記録した．原稿用紙40枚近くになり，神緑会よりの依頼5枚にはとても書き表わせないので最初の部分だけにした．

なお入院患者さんは全員無事，外来患者さんは200人以上治療したが，約20人はすでに死亡していた．全員傷1つない窒息死であった．

そしてあの若い外来看護婦さん1名が圧死していた．婚約者がいつまでも瓦礫の上で泣きくずれて居た．御冥福を祈る．

生後まもなくの赤ちゃん，4～5才ぐらいの男の子，若い母親の一家3人絶命は一層哀れであった．残された女の子と若い父親の大きな悲しみの声がいつまでも耳を離れなかった．

子供達の絶命が多く若い看護婦さん達「頑張って！」「頑張って！」「生きて！」「生きて！」と涙を流しながら心臓マッサージを続けていた．

今は昔の様に医師は患者に病気を治してやると言う気持ではなく，患者さんは“病客”と思えと言う考えが多くなっているが，本当はもう一歩進んで，患者さんは「ファミリー」「同胞」「仲間」……と考えなければならない．病気を治すのではなく，病人とその環境をお互いに協力して治すことを今回の震災でより一層強く感じた．